unicef

ユニセフと地球の子どもたち③

http://www.unicef.or.jp

カンボジア
Kingdom of Cambodia

ゆたかな実りがもたらす家族の幸せ

ニームくん（十歳）は、カンボジアの農村に住む男の子。両親と三人の弟とくらしているよ。小さな畑で細々と野菜をつくる生活は苦しく、子どもたちは育ちざかりなのに、おなかいっぱい食べられないんだ。ユニセフは、ニームくんたちのような一家をささえるため、家庭菜園を広める活動をしているよ。



カンボジア北部の農村のようす　©日本ユニセフ協会



ぼくたちは、いつもおなかがすいていました。やせていて、よくかぜをひきました。学校に行きたかったのですが、毎日の生活にも苦しく、ぼくたちの手伝いを必要とする両親にいい出すことができませんでした。

そんなとき、ぼくの村で、ユニセフの支援を受けて、広い畑で野菜やくだものを育てる「家庭菜園活動」が行われることになりました。

この活動に参加できれば、たくさん収穫できるので、収入がふえ、生活がよくなります。また、作物のもつ栄養について学び、健康によい食べ物をおぼえることもできます。

ユニセフ支援の家庭菜園活動
健康になり学校に通う楽しさ

お父さんの話聞き胸おどる

「いまより広い畑で作物を育てることができれば、みんなが元気になれるし、学校にも行けるようになるよ」と、説明会に出たお父さんがいいました。



「お父さん！　ぼく、お手伝いを一生懸命するよ。学校に行きたいんだ」と、ぼくは答えました。おなかいっぱい食べられる！　元気になれる！　学校に行ける！　うれしくて胸がドキドキします。

村の会議で、ぼくたち家族のやる気ができて、元気いっぱいです。

家で学校の話をすると、お父さんとお母さんは「学校が楽しくてよかったね。一生懸命勉強するんだよ」と、笑顔ではげましてくれます。



学校が終わると、ぼくはお父さんとお母さんが働く畑に走って行きます。畑は、ゆたかな実りでいっぱいになっていて、見ていると幸せな気持ちになるからです。ぼくは「元気に大きくなるんだよ」と声をかけながら、手伝いをしています。



ぼくたちは、いつも家族で畑のことを話しています。生活が安定し、ぼくたちはすっかり健康になりました。ぼくと弟のリンも学校に行けるようになりました。勉強は楽しいし、すぐに友だちもできました。六年生のみなさんは、途上国について調べたことを発表。テレビ電話を通じて、日本ユニセフ協会の職員といっしょに、どうすれば世界の子どもたちをすくえるかを考え、話し合いました。

世界の子どもたちについていっしょに考えたテレビ電話授業は、畑野小学校のみなさんにとって良い勉強と思い出になりました。

掲載は一週おき。次は十九日の予定です



ユニセフといっしょに

京都府亀岡市
畑野小学校

「京都と東京。遠くはなれているのに、テレビ電話でお話を聞いていると、近くで授業を受けているみたいでした」

畑野小学校と東京の日本ユニセフ協会をテレビ電話でつないで、世界の子どもたちとユニセフについて学ぶ「テレビ電話授業」を、去年の十月から全部で五回、行いました。

東京からは、きびしいくらしをしている世界の子どもたちや、ユニセフの仕事について話しました。

東京と京都をつなぐテレビ電話授業

テレビ電話で、日本ユニセフ協会の職員と話す畑野小の子どもたち

カンボジアで栄養が十分でない子どもの割合（2001年）



世界のすべての子どもは「権利」をもち、「子どもの権利条約」に守られています。

第六条【生きる権利・育つ権利】は、子どもはみんな元気に大きくなれるようにしなければならないとしています。

「家庭菜園活動」

子どもの権利条約

など、ユニセフは子どもたちの生活を良くする活動をしています。これは「かわいそうだから助けてあげる」のではなく、どこの国に生まれたとしても、元気に大きくなれる権利を守ることです。栄養を十分にとり、学校に行くことは、だれもがもつ権利です。

おしえて！ユニセフ



いつもん　だれがユニセフをつくったの？

こたえ　第二次世界大戦が終わったあと、世界には、親や家をうしなうなど、きびしいくらしをしなければならなくなった子どもたちがたくさんいました。

そうした子どもたちを国連で助けようと、ポーランドのルドウィク・ラフマンさんという人が誰がつくったのをもとに、一九四六年十二月十一日、国連の第一回総会で、ユニセフの創設が決まったのです。

ポーランドの人が提案
158の国と地域で活動

ユニセフは、まず子どもたちに食べ物や薬をとどける活動を始めました。その後、戦争の被害を受けた子どもだけでなく、世界中の子どもたちの命とくらしを守る活動に取り組むようになったのです。

こうして現在ユニセフは、百五十八の国と地域で、子どもたちのために活動しています。



©UNICEF
ルドウィク・ラフマンさん

